

一橋大学端艇部・四神会

畠山 雄三郎（文責者）

端艇部と四神会は一心同体であり、年齢・卒年の上下を弁ずることなく平らかであり、屁理屈を知らず元気であることを幸いとし、その交わりの淡きこと水の如しと言える。

端艇部は明治 18 年創部以来 135 年を迎え、四神会は大正 8 年設立にして昨年 100 周年を祝った。

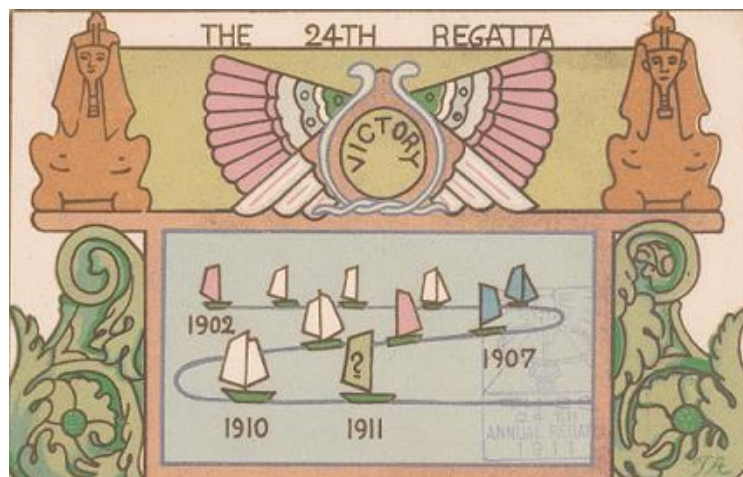
一橋大学はボートを校技とし「橋人皆漕」を校是とした長い歴史がある。まずそれを紹介する。

○クラスチャンピオンシップレース：

明治 20 年の第一回校内競漕大会に源を発し、経年開催主体を変えながら今は学生自治会新入学生歓迎行事として盛大に継続されている。新入学生はここで初めてボートに触れて一橋大学生であることを実感することになり、「ボートを漕いだ」という思い出は端艇部に入らなくても終生消えることはないのである。

○HCS 大会：

初代端艇部長関一が明治 20 年以来 15 回行われた学年対抗戦を廃し、明治 35 年より「Higher Commercial School」の頭文字を採って全校を H 組 C 組 S 組に分け、3 組対抗戦として始めたもの。全生徒の年代を超えた交流の場であり、各組の第一選手から対校選手が選ばれるシステムで、一橋ボート強化の舞台として役目を果たしてきた。その後趣旨を変えながら、現在は「全一橋ボート祭り！（大学・一般学生・如水会・家族等）」と「部内対抗 HCS 大会」との両翼を拡げ、今年の秋で 130 回目を数える。H・C・S 各組に分けられた部員は、OB と共に毎年新年に「スタート会」と称して集まり、交流を深めることを楽しみにしている。現役部員が OB に自己紹介する時は必ず「*組の**です」と唱えることが自然に行われている。H・C・S の各組はそれぞれにカラーがあり、対抗意識があっても「**君は C 組だから・・・」という言い方をしている。



明治 44 年第 24 回春季競漕大会記念絵葉書（帆色：赤 S 組・白 C 組・青 H 組の優勝を表す）

○「橋人皆漕」：

同年設立の学生自治組織「一橋会」は、その会員全てを端艇部に属することとし、「橋人皆漕」の伝統を作り出した。上記の二大会はその歴史を体現し引き継ぐものとして、一橋人に愛され続けている。

1. 一橋大学端艇部の歴史

一橋大学の源流は明治8年商法講習所にある。明治17年東京商業学校と名称を変え、翌18年には東京外国語学校の一部を併合したが、その時に東京外国語学校の一隻（もう一隻は一高へ）のボートが移管され、それが一橋のボートの始まりとなった。当初は商人風の高商と書生肌の外語の気風が熱を帯びて対立するが、次第に後者が一橋の風格を形作るようになっていった。併合前の外語でのボート（カッター）熱は高く「ボートと海外雄飛」が結び付けられており、一方の高商は前垂れ・算盤の世界であったわけで、一橋ボートの源流はむしろ外語側にあったとも言える。

ともあれ、明治19年高商は新たに6艇を新造し、神田一ツ橋から蔵前の係留場まで繁々と通い、熱狂的にボートを漕いだのであった。こうして「ボートの一橋」と自他ともに認める存在となって行ったのである。

そうした雰囲気の中で、明治20年高商は東京帝国大学第1回競漕大会に招待を受けるが、明治32年まで6回戦い6回負けてしまった。双方の応援の過熱を危惧する学校当局によって以降対校戦は戦後の東商戦まで行われることはなかった。当時の詳しいことは省くが、高商の悲憤は行き場を失い、ある年秘かに端艇部の猛者を柔道部に潜り込ませて一矢を報いんと一高対校戦に挑んだがこれまた負けてしまう。50余年の後、昭和27年第4回東京大学・一橋大学対校競漕大会（東商戦）で宿敵東大に勝利した感激いかに大きかったか、想像に難くない。

一橋のボートはこれだけで語れるものではなく、戦前戦後を通じ全日本エイト優勝：戦前6回・戦後3回など日本ボート界を牽引し広く活躍したことはJBCの方々の良く承知する処と思料するが、下記に幾つかトピックスを御紹介する。

○艇庫の歴史（竣工年）：

明治19年蔵前にボート係留所を設置した後、

- ①明治31年：蔵前仮艇庫
- ②明治39年：初代向島艇庫（大正12年：関東大震災で焼失）
- ③大正12年：向島仮艇庫
- ④大正13年：赤羽艇庫
- ⑤昭和4年：尾久艇庫
- ⑥昭和5年：2代目向島艇庫（昭和42年解体）
- ⑦昭和6年：多摩川艇庫（尾久艇庫を移築）
- ⑧昭和31年：戸田木造艇庫合宿所
- ⑨昭和38年：戸田仮艇庫
- ⑩昭和39年：戸田旧艇庫
- ⑪昭和47年：相模湖艇庫・合宿所
- ⑫平成16年：戸田現艇庫



戸田旧艇庫（昭和40年代中頃の絵葉書）

○遠漕の初め：

江戸川大学古城庸夫教授（近代ボート競技歴史研究）の「ボート競技が行った遠漕についての研究」によれば、銚子遠漕を最初に実施したのは明治 31 年初頭一橋大学（当時高等商業学校）であるという。

『一橋ボート百年の歩み』によれば「隅田の水はテムズ河に通ずる」のだから、その気になれば地球上のどこへなりとも漕いで行けるはずである。テムズに行くのは大変だから、まずは手始めにというわけで、記念すべき銚子遠漕が試みられたのである。」という。その後早稲田・慶応・東大等多くの学生が実施し、冬の利根川は遠漕のボートが行き交う場となった。JBC の方々も、神崎での「洗礼」や“なんじゃもんじゃ”へのお参り、銚子大新での宴会など、「楽しい」経験をされていることと思う。尤も、管見に依れば、明治 28 年『一高 校友会雑誌』に一高生が隅田艇庫から銚子吉野家まで遠漕した記事があり「遠漕」の起源は未だ混沌としている。

○「吾輩屁理屈を知らざるも幸に元気あり」：

岩下家一・菅禮之助（共に明治 38 年卒）両氏は「漕艇管見」（明治 37・38 年）の緒言に「過古に於て実地に経験したる漕艇技術の私見を開陳して我端艇部が将来建設すべき大漕法の礎石に向ひ、この一片の瓦礫を添へむとす・・・」と記し、一方「端艇を以て近代における武士道の一なりと確信」しボート精神論の重要性を認めながら、「吾輩屁理屈を知らざるも幸に元気あり」の一言を残したのである。以来この言葉は一橋ボートマンの口癖となり、向島艇庫の壁面を飾り、いまは村松祐次端艇部長の揮毫「為艇友 幸有元気」が安全祈願碑に嵌め込まれて一橋ボートマンに語り掛けている。

○明治 40 年 12 月 30 日「利根川宝山沖朱雀艇遭難・艇友死亡」：

S 組第 2 選手の練習艇朱雀号は遠漕の帰路寒風の中三角波に襲われ沈没し、柏木条作氏・村井俊二氏の 2 名が死亡。数年後徳野隆祐氏が遭難の影響で死亡した。当時の柳川家によるクルー救助の御尽力に報いるべく、一橋端艇部クルーは銚子遠漕の都度宝山に柳川家を表敬訪問している。各校遠漕クルーも宝山沖の卒塔婆に奉納力漕を捧げる習わしであった。

昭和 51 年遭難現場に 3 名の宝山沖遭難慰霊碑を建立し、全てのボート関係者の銚子遠漕の安全を祈念するところとなった。平成 19 年 100 年慰霊祭を挙行。

一橋端艇部は、昭和 44 年ジュニアエイト荒川遭難（2 名死亡）も含め、その痛恨の遭難を念頭に常に安全への配慮を怠らず、また各校関係者の安全を願って止まないのである。

○「MENS SANA IN CORPORE SANO」（健全な肉体に健全な精神が宿る）：

向島艇庫の塔に飾られた紋章に書かれた格言である。「メンサナ」と呼ばれ、一橋ボートのシンボルである。一橋向島艇庫は震災復興計画の一環として新隅田公園の一角に東大艇庫と並んで竣工したのであるが、互いの対抗心は設計変更にまで及び、この紋章の実現もその一つである。以来一橋大学端艇部を見守ってきた象徴である。いま相模湖合宿所敷地内に記念碑として保存されている。

一方でこの格言は、一橋向島艇庫に飾られる以前からオアズマン・スポーツマンの間で語られていたもので、他校のメダル等にも刻まれている（下図参照）。また、今では忘れられた？『端艇詩集』＝「竹中久七（慶應義塾體育會端艇部出身）詩集」（大正 15 年）の中表紙識語（図略）にも引用されている。隅田川を見守っていた一橋の「メンサナ」紋章は、謂わば隅田川ボートマン全体の肉体・精神を代表する象徴であったとも言えよう。



雪の向島艇庫とエンブレム



戸田艇庫エンブレムレプリカ



向島艇庫モニュメント
相模湖合宿所に安置さる！



昭和54年『部報』第65号



令和元年改修後同記念碑



1935・昭和10年東京帝国大学漕艇部



1936・昭和11年慶応義塾体育会陸上大運動会



1961・昭和26年HCS(秋季大会)



1914・大正3年桐?会
一橋?



年代不詳・旧制四高運動会



1935・昭和10年明治大学
第2回体育大会



1908・明治41年



明治大学学友会「漕」

1915・大正4年



1917・大正6年

また、『墨田区の100年』に「地元っ子たちはこのメンサナを見て育ったのである。」と書かれ、地域との結びつきもあったことは嬉しいことである。

○フェアバーン漕法：

昭和2年、一橋端艇部は従来の「オーソドックス漕法」からフェアバーンの「自由漕法」を導入し、ボート界に大きな変革をもたらした。一橋ボートの挑戦スピリットの表れといえる。大正15年フェアバーン『Rowing Notes』は先輩の持参するところであったが、翻訳は若いOB・学生に託され抄訳されて後日『漕法研究』として四神会が発行した。昭和2年この新しい漕法でインカレ優勝し、その理論の優れた面を証明して見せたのであり、各大学もその漕法に熱を入れることになった。不思議なことにその後8年間新漕法の一橋は力がありながら優勝できず、早稲田大・東大等にお株を奪われてしまったが、この画期的な漕法導入のきっかけを作ったのは一橋であり、このことは後世に多くの示唆を残した。



○シェル艇の国産化

上記新漕法を採用した遠山不羈夫コーチは、同時に従来輸入イギリス艇等の模倣であった艇を独自に設計すると共に材質も変えていった。オール長さ・巾も検討対象となった。

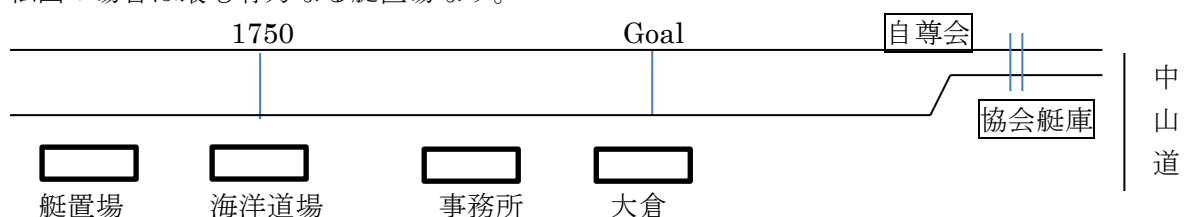
各校はデルタ造船・岡本造船・野口造船などに自前の設計で発注し始め、その特徴を發揮すれば優勝の如何を左右するまでとなり、永く技術の蓄積が行われていった。

現在は外国製のFRB艇になり、採算性からか国産艇は、特にエイトは姿を消してしまっただ。果たして艇は輸入既製品で良いのか、再考する時であろう。

○終戦直後の戸田コースの視察記：

昭和23年の一橋端艇部員畑弘恭（日本オアズ・マン倶楽部現会長）氏の戸田コース視察記を紹介する。6月7日日本漕艇協会は「畑氏と関係者で戸田コース事前視察」を決議。10日に出発する。畑氏の報告は次の通り。

「・・・巢鴨駅より都バスにて約25分（¥10.-）にて志村橋に達し、更に徒歩約15分にてコースに至る。両岸は荒るるが俛に草伸び或は耕作中。コースを眺むるに水位可成低下。水深は1コース1.5m、1～2コース2m、2コース1.5m。大体この水深を保ちあるも、Start～500mの間にあつては現状の俛にてはレース不能なるものなる由、尚水位の上昇は荒川本流側水門の制御により可能の由なるも、人により一致せず。藻の状況は1500m～Goalに於ては問題になるに足らず。次に設備を見るに艇庫設備が不足なり。自尊会艇庫は大艇の格納不能。大倉艇庫は3隻分の格納能力あるのみ。海洋道場艇庫はアーム設備なく、馬によるもエイトにありては両端突出するものと思はる。漕艇協会艇庫は目下引揚者に占拠せられ倉庫化しあるも之が移転出の場合は最も有力なる艇置場なり。



合宿設備として利用し得るは大倉艇庫及海洋道場なり。大倉は問題外として海洋道場は大広間を利用する場合、恰も呉越同舟の形をとるは必定なり。(図面略)

大部屋を共同利用するに当たりては柱を利用し境界を作成するの要あり。道場の付属設備として便所、炊事場、風呂場の設備あるも、炊事場の如きも共同使用不可能の如く、第一の問題として水利はモーターなき為悪く、隣設の事務所に貰い水の状況なり。尚蚊の発生盛なる由。境界を以て外部と遮断することなきにより、艇、部品、其の他の盗難の恐れなしとせず。

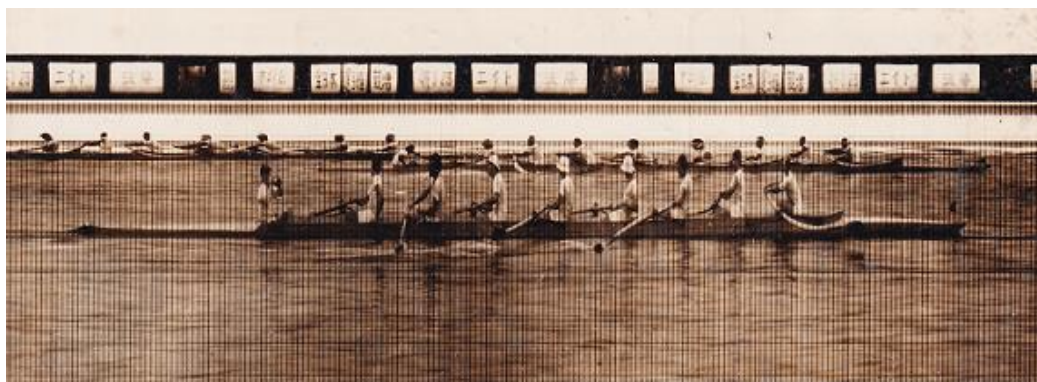
Start 方面は所用のため行かずした為状況不明なるも協会に於て発表せらるると思う。Start を見ざるの予想としては東田氏*以下は当コースに於るレースにつき、深き熱意を有するものの如く強行せよとするの意志強し。手始めとして差当り 8 月 8 日のインター・ハイ、9 月 20 日早慶レースを強行し結果に俟ちたしとの意見ありき。強行せんとせば不可能ならず。我々としてコースを除く他の条件を総合し、反対の表示を強力に行ふべく諸般の準備を行ひおくを可とす。・・・」(*東田正信氏・早稲田 OB)

その後 7 月に第 1 回「戸田コース懇談会」が開かれ、建設院・文部省・埼玉県・東京都・日本漕艇協会などで戸田コースの改修・再建を目指す機関となり、8 月にはインカレ・国体兼全日本選手権の戸田コース開催を決定したのである。

○オックスフォード大クルーを撃破。6 分 29 秒 1 0.1 秒差でオックスフォードを破る：

昭和 34 年、遠来のオックスフォード大クルーを一橋クルーが全日本・朝日レガッタ茨戸に於いて 2 度撃破した。

全日本レース経過：一橋クルーは、決勝相手の東大・オックスフォード・東北大学の内、東北大に的を絞り、恐らく東北大がスタートから喰らいついてくるだろうと予想していた。実際一橋はスタートからリードし、1000m、1500m 位で東北大とも差ができて勝利を確信したかもしれない。ところが 1750m 位になりオックスフォードの追上げが物凄く、あるメンバーは「最後の 150m 位は全く記憶になく、もう無茶苦茶にピッチを上げたと思う。一緒にゴールしたので勝敗が直ぐに分からなかった。随分ゴールで待ちぼうけを受けて、漸く一橋が 30 cm 差で勝ったという連絡があった。」という激戦であった。土手では一旦オックスフォード勝利とアナウンスされたが、写真判定で一橋の勝利となったそうである。



(富士フィルム使用 山口シネマ撮影)

写真は全日本決勝レースのゴール写真判定(一位本学、二位オックスフォード大)新艇建造資金募金運動は、皆様の絶大なる御協力によりまして、表記の通り目標を達成致すことが出来ました。こゝに深く感謝致す次第であります。今後とも一層の御支援を端艇部に寄せられんことを御願致します。

優勝記念絵葉書(ゴール判定写真・昭和 34 年)

この優勝に於いて村松祐次端艇部長は狂喜して滞在中のロンドンから祝電を送り、言うまでもなく大学・如水会による祝賀が盛大に行われたのである。

因みに、オックスフォード大学が帰国に際して当時の日本漕艇協会に寄贈した盾は「オックスフォード盾レガッタ」のもととなって昭和 36 年より若手クルーの登竜門として開催され、一橋は第 1・2・4 回レガッタに準優勝し第 32 回レガッタで優勝している。

○「常強一橋」:

昭和 42 年全日本優勝以来幾つもの起伏を経て平成 21 年からのインカレ・全日本の決勝進出の常連となり、国公立の雄としての挑戦が始まる。基本的に運動部の O A 入試制度の無い国公立大学はほぼ「0 : ゼロ」から選手を育てることになるが、一橋大学端艇部も同様であり、この 10 年余の歩みにおいて日本一という目標は未達成であるが、「常強一橋」のスローガンのもと、指導体制の充実・選手の意識改革・四神会との連携・如水会の支援・大学との親和性の構築・施設設備等練習環境の充実などを掲げて、常に目標に立ち向かっている。

また、一橋端艇部は昭和 43 年初めて女子部が作られ当年代は昭和 46 年全日本女子選手権シングルスカル 2 位・4 位という成績を残している。続く昭和 44・45 年入学の女子選手を含めて第 1 期の女子部を形成した。その後平成 2 年の女子入部により第 2 期女子部が誕生し、以降シングルスカル・ダブルスカル・クォドルプル・エイト決勝に進出し、オリンピック強化選手を輩出したり、私学の高校ボート経験者クルーに伍して活躍している。

一橋は社会科学の大学であるが医師も多く活躍が見える。四神会会員の小形滋彦（昭和 52 年卒）氏は、長年チームドクターとして端艇部・四神会を強力にサポートしている。一橋ボートの歴史の中で特記すべき貢献であり、「常強一橋」を支えている柱の一つである。

○五輪等国际大会：端艇部（四神会を含む記録）

①五輪：単独クルーとしての五輪出漕はないが、

○昭和 39 年東京五輪 8+ に 3 年生長谷川農氏、

○平成 28 年リオ五輪 2× に中野紘志（平成 23 年卒）氏が出漕。

○現在荒川龍太（平成 29 年卒）が候補選手として東京五輪出場が期待されている。

②U23 世界選手権：平成 25 年（チェコ）軽量級 M4- に 3 年生中野紘志氏が出漕。

ボートの国際大会初めてのメダル（銀）を獲得。

③世界ボート選手権：平成 17 年（長良川）M4×- に 3 年生原田芳宏氏が出漕。

④世界軽量級選手権：昭和 54 年（ブレド）8+ に一橋単独クルーが日本代表として出漕。

昭和 58 年（デュイスブルグ）8+ に一橋単独クルーが日本代表として出漕。

○マネージャー組織：

第 2 期女子部のスタートとともに、マネージャーの役割の多くを女子部員が担う時代となっていた。従来は男子部員がサポートに回り縁の下力になり、多くの名バックマンを生んできたが、平成 2 年以降は女子部員がマネージャー専属として入部するようになってきた。また、平成 17 年には、創部以来初めて女子の代表幹事が誕生し以降平成 25・27 年・令和 2 年と続いている。今後も女子漕手と共に端艇部を支える大きな存在として展開してゆくことになろう。

2. 一橋大学端艇部四神会

○創立 100 年の歴史：

四神会は現在昭和 23 年卒業から令和 2 年卒業まで 74 歳の幅を持ち、会員数約 1100 名の会員を擁する「一橋大学端艇部後援会」である。

設立は大正 8 年（1919）3 月で 2019 年に 100 周年を迎えた。残念ながら設立時の趣意書等資料が残されていないが、翌年には新艇建造募金を開始した時の趣意書が残っている。四神会の命名は「母校端艇名に因みて命名す」とあり、その端艇名の由来は『一橋五十年史』に「明治 22 年 3 月には石川島造船所に命じて 6 艇オールの固定席艇 4 隻を建造進水せしめ、これに「朱雀」「白虎」「青龍」「玄武」の名を付した——学校当局の選ぶ所である」とあり、「当局の選ぶ所」は明確ではないが、大いにく橋人の好む所>となっている。

戦前の端艇部の基本的収入は、校技としてのボートを担う組織として、学生自治組織「一橋会」からその予算の大部分を得たものであり、運営上は豊かな財政を享受していた。四神会からは造艇等テンポラリーな支援が中心であり、端艇部に艇が必要ならば直ちに基金を組んで対応していた。支援は会員の富裕層の厚さによって支えられていたと言えよう。

しかし終戦後の混乱期には、浅沼商会・東洋水産などの篤志家による食料等物的な支援が端艇部を支えていた。端艇部にとっても、四神会にとっても感謝しきれない支援であり、今日までの存続はこれによるものであると言っても過言ではない。資金面では、レッドオールの現物寄付＝オールに寿命がくるとオールが記念品として贈られるというシステムで「レッドオア寄付運動」と名付けられ、成果を上げていた。とはいえ潤沢とは言えない支援の中からも、端艇部は部員に対する学資貸付・奨学資金提供等を行い、造船会社・近隣商店への負債も抱えながら遣り繰りをしてきた。各校に共通することと思うが、資金獲得のために「ダンスパーティー」券を売ったりしたのもこの頃のことであろう。

昭和 30 年代後半になると四神会組織も強化され安定した会費収入が確保できるようになり、会員全体が四神会を支え端艇部を支援する今の形が出来上がっていった。そこに至るまで、四神会員の努力・学生幹部の尽力が大きく寄与したことは言うまでもない。因みに会員の納入率は名目 80% 実質 70% となり端艇部への物心に互る支援を可能にしている。

○OB の漕艇グループ

四神会会則によればその事業の中に「会員の漕艇、競漕、観漕、その他の諸行事への便宜供与」を挙げている。会則が出来たのは昭和 9 年であるが、当初の活動は「競艇を建造し競漕会を開催し、又は代表選手を任命し競漕に参加せしむること」にあり、四神会選手のレースへの派遣は大きな関心であった。事実主要な大会の OB レースに四神会の名前を見ることがある。戦後においては必ずしも四神会会員の出艇は顕著ではなく、昭和 40 年代の全日本選手権・相模湖レガッタでの活躍が僅かに見られる程度である。

そこに風穴を開けて四神会会員のボート熱を再び掻きたてたのは他ならぬ昭和 39 年東京五輪エイト選手であった長谷川晨（S40 卒）氏であり、「四神会百周年記念」の席で次のように語った。

「東京五輪では、残念ながら決勝に残れなかった。敗者復活戦で優勝のアメリカとぶちあたって負けてしまった。選手村でオリンピックの閉会式の日、日紡貝塚のバレーの歓声を聞きながら閉会式を迎えた後、コーチの堀内浩太郎（東北大漕艇部 OB）さんから「何時までも漕ごうよ」という言葉が私たちに贈られました。「いつまでも漕ごう」という言葉はその後の私の日々の生き方のテーゼとなっている。この十数年位前から一つの発想としてく愉快地に漕げば強くなる>、即ち「愉快地に漕ぐ会」というものを立ち上げて堀内さんの言葉を実践している。」ということである。

現在「愉快地漕ぐ会」を契機として次に様なグループが生まれている。

- ①「愉快地漕ぐ会」：長谷川晨氏を中心に昭和 30・40・50 年世代が活躍している。最も構成員が多く、カテゴリーも幅広い。現役時代に勝てなかった東大を負かすために編成された 50 歳代クルーは、数年前その目的を果たして「愉快地漕ぐ会」に融合し引き続き愉快地漕いでいる。毎年末に「芋煮会」を催したり、艇庫植栽の手入れ、最近では戸田コースの藻刈り等をしてオアズマンらしさを発揮している。
- ②「三四 ROW 会」：昭和 34 年卒辻巻孝氏を中心に同期のマネージャーが集ってクルーを編成している。昨年 80 歳の大台に乗ってカテゴリー「J」「K」として国内外のマスターズで活躍している。当時の対校選手ではなく、マネージャーが中心なのは「昔漕げなかったのが今漕ぐ」というのがクルーの一致した気持ちだそうで、勝負に拘っている元気なクルーである。
- ③「四神会ミドル」：新堂博英（昭和 60 年卒）氏が世話役となり、40 代、50 代の若手の集団を形成している。働き盛りの年代であるが、他校との交流も活発で対抗戦の招待レースで 2000m に挑戦したりしている。
- ④「スカル指導会」：正式名称は不明であるが、昭和 35・36 年全日本選手権シングルスカルの優勝者である登里貞治（昭和 38 年卒）氏を指導者として、スカルを使った漕艇指導に力を入れている。
- ⑤「パルテ会」：各校の比較的若い層が集まって、揃いのブレザーを着用するなどイギリス風のスタイルをシンボルマークとしている。四神会単独の会ではないが、多くの四神会会員が入会して漕いでいる。
- ⑥その他各年代や前後を集めた同好の士が適時集まってボートに取り組んでいる。各グループはそれぞれに活躍するとともに、会を超えても適宜融通無碍に再編成され、四神会会員の活躍の場は多くの機会を網羅している。漕ぐ面からも現役学生を応援していくつもりである。

●参加する代表的な大きな大会は国内外で開催される「マスターズレガッタ」であろう。

*全日本マスターズレガッタ：

四神会は 2008 年の第 1 回全日本マスターズ（愛知池）から今年の浜寺での大会まで毎年 8 十を 3 杯時に 4 杯、4×十、4×十、2×、1×など多種目に大勢で参加してきた。また三菱ボートクラブクルーに参加して出漕する人も多く、協調関係を築いている。

第 1 回の愛知池での「G」エイトレースでは四神会と三菱が最後まで競り合ったが惜敗し以後なかなかエイトでの優勝は叶わず。第 6 回（愛知池）の「H」エイトではトップを行く淡青会をラストスパートで追い上げ、抜き切ったか同着かと期待したのにわずか 15 cm 0.04 秒差でまた涙を呑んだ。2017 年第 10 回（戸田）のエイトレースで「F」「I」「J」の 3 クラスで優勝し長年の努力がやっと実り皆で喜ぶことができた。

2019 年の大会では、総勢 48 名・18 クルー・年齢は「D」から「K」までの 8 カテゴリーを誇り、優勝 6 クルー・2 位 6 クルー・3 位 4 クルーの立派な戦績を獲得している。

また四神会メンバーに中央大 OB 伊藤次男（昭和 39 年東京五輪エイト代表）氏やカール・トイシュ（米国）氏も準メンバーとして加わってクオドプルで毎回参戦し、第 2 回（諏訪湖）以外のマスターズで連覇中である。

*世界マスターズレガッタ (WRMR) :

四神会会員は日本勢として最初に参加し、現在も大活躍している。

日本から団体として WRMR に参加したのは、2000 年にハゼウインケル (ベルギー) で行われた第 27 回大会の三菱シニアボートクラブが初めてで、四神会員の高井秀雄 (昭 35 年卒) 氏、寺尾一樹 (昭 36 年卒) 氏、野村覚蔵 (昭 38 年卒) 氏、木村希一 (昭 39 年卒) 氏の 4 名がその F8+クルーメンバーであった。

その翌年から日本のクルーが毎回参加するようになり今や他のクラブや大学 OB 会が毎回 10 団体ほど参加している。

四神会員としては三菱シニアボートクラブのメンバーにもなっている人が多く、三菱クルーで出漕あるいは四神会クルー (Hitotsubashi RC) あるいはその両方で出漕しているが、堀田久彌 (昭 31 年卒) 氏を筆頭に 50 歳代の会員まで 40 名ほどがマスターズ出漕経験者である。なお、最近では四神会・三菱以外の団体メンバーとして出漕している会員もいる。

四神会単独クルーとしての参加は 2009 年の第 36 回ウイーンが初めてで、2012 年の第 39 回デュイスブルグ (ドイツ) を経て 2017 年の第 44 回ブレド (スロベニア) と 2019 年のヴァレンチュ湖 (ハンガリー) には多くのクルーを出漕させた。

WRMR には 2007 年の第 34 回ザグレブ (クロアチア) から始まった 80 歳を超えて尚且つ元気に出漕するオアズマンを称えて OAR (Octogenarian Active Rowers) メダルを授与する準公式行事があり、堀田久彌氏をはじめ、山口正光 (昭和 32 年卒) 氏、田口平氏、小路英明氏、小西恒彦氏、鈴木文雄氏、辻巻孝氏 (以上 5 氏共に昭和 34 年卒) 等がその栄に浴した。

また、漕ぐことを目的としないが組織・会合として、

*「四神会 OG 会」:

昭和 43 年女子部創設以来四神会は現在多くの OG 会員を擁しており、平成 13 年には内部組織として「四神会 OG 会」が発足している。OG 会員は、学生・就職・結婚・家庭・育児等人生に於いて多面のシチュエーションに置かれることから、男子会員とは違った会員対応が求められ、またその意見集約機関としても役割を担っている。

*「一木会」:

終戦後早い時期に<ボートを語る会>として発足し以来連綿として続いている。話題は常に「ボート」に限定され、最近では四神会幹部の出席もあって端艇部の現状報告が加わり、より広い談論風発の会となっている。

3. JBC と四神会

JBC は、猿渡央氏 (東大 37 年卒) を中心に各大学の同期生が参画して設立されたが、四神会からは、森下一乗 (一橋大 37 年卒) がその設立発起人の一人として加わり設立活動を行った。その後、2017 年 (平成 29 年) の JBC 新体制発足に際し、JBC の新たな活動目標として<会員相互の懇親・交流、小学生等青少年へのボート普及活動、東京オリンピック支援等>が掲げられた。従来四神会会員の参画は少人数であったが、JBC の趣旨に賛同した四神会会員 25 名が新たな会員として現在登録されている。

以上